

第50回 川崎市幼児教育研修大会

第7分科会 新任教諭研修会

月 日 平成22年1月20日(水)

場 所 中原市民館ホール

講 師 内藤 知美先生

(東京都市大学人間学部教授)

テーマ:「子どもの言葉をはぐくむ保育」

俯瞰図番号 CI-1

○言葉の問題を考える。

1. ワークショップⅠ

「応答、コミュニケーションの大切さということ」

①二人組になりAとB役に分かれる。

a A…話し手(普通に話す)

B…聞き手

(交代で両方行う。)

b A…忙しい保育者

B…子ども

になり、子どもが話し掛ける。しかし、Aは忙しそうで話し掛けても相槌もうたない。子どもは聞いてもらいたいことを一生懸命話す。(交代する)

②メモにどのような感想を持ったかまとめて書く。(1～2行)

→aでは聞いてもらえないので話をしたくなくなったり、相手を怒らせてしまったのではないかという気持ちになった。

→聞くことをしないと子どもの声が流れていってしまう。それを続けると音(BGM)にしかな聞こえない。

◎応答、コミュニケーションは言語以外のこと(相槌、うなづき)でも返せる。しかし、応答のない会話は自分が悪いことをしてしまったのではないかというような子どもの気持ちを育ててしまっている。

ワークショップⅡ

「ものの見方を変え、言葉にすること」

①メモに自分の短所を少し詳しく書く。(自分

の短所は～です。例えば～のようなときには必ず〇〇してしまいます。)

②2人組になりメモを交換する。そして、相手の短所を長所に変えてみる。(あなたは～を短所だと言っていますが、私はそれはむしろ長所だと思います。なぜかという〇〇だからです。)

③お互いに交換し合い、感想を話す。

◎言葉の究極の目標…ものの見方を変える。

→言葉を変えるということはものの見方を変えていける力になる。その子なりのよさをもの見方を変えることで、子どもに掛ける言葉が変わる。まずは大人が行い、子ども同士でもそうなるとうい。

ワークショップⅢ

「聞くということ」

①1分間着席して、じっと耳を澄ます。

②何が聞こえてきたかメモをとる。

→聞くということで子どもの息づかいも聞こえる。

③聞く相手がなければ、応答できない。

2. 子どもの言葉をめぐる「誤解」

誤解①体の大きい人には言葉を多用する。

→この子は大きいから分かるだろうという誤解。体の小さい子には一緒に動いて伝える。

◎1人1人の力を考える。言葉が先にくるのではなく、もっと一緒に手をかけていくことが大切である。(特に3歳児)

誤解②0歳児には絵本のストーリーは伝わらない。保護者は誤解している。

→言葉の遅れに対して言葉の学習をするのではなく、体を使った動きから言葉の獲得につなげる。直そう、覚えさせようという考えはやめる。そのような考えは様々な面でゆがみを表出させてしまう。

(例)

2歳男児…ブロックを積み上げようとするが、なかなかできない。すると、周りにいる子を叩きはじめる。それに対して「なんでぶつの！」と注意をするが納得できないようす。

- ・なぜ、どうしてという言葉に2歳児はまだ答えられない(言葉が未熟である)。説明できないから手が出てしまう。このような場合には「積み上げられなくて悔しいね」などと共感する声掛けをするとよい。言葉の獲得につながる。

◎言葉の発達には道すじがある。それを飛び越えるのは不可。

- ・3歳児になると日常会話はほぼ話せるようになる。就学前の言語の経験や見えない3年間の育ちを視野に入れながら子どもと関わっていく必要がある。

3. 幼稚園入園までの育ち(資料参照)

<全体の発達>

①おおむね6ヶ月未満

②おおむね6ヶ月から1歳3ヶ月未満

→からだ動くことが言葉になっていく。1歳前後で自分の言葉で話すようになる。

(例)

ミルク…「ジャージャー」

ヤクルト…「ジャ」

- ・自分で大きさを見て言葉にする。言葉を主体的に使う。

③おおむね1歳3ヶ月から2歳

→“動ける”ことが嬉しい。

④おおむね2歳

→基本的運動機能や指先の機能が発達。

“やりたい”が“できない”しかし、それを言葉にできない。

⑤おおむね3歳

→繰り返し同じ言葉を使いながら、自分で使える言葉を増やしていく。そういう時期だけ

らこそ言葉が育つ。

<言葉の発達>

- 生理的な共鳴が育っているか。

→嬉しいことがあると一緒に喜んで跳びはねるなど。(同調する身体)そういう気持ちが育っていなければ絵本などで補う。

- 聞いてもらうことを十分に体験しているか。

- 話したくなる・親しみのある身近な人がいるか。

- うれしい、悲しい、悔しい、楽しいなど、色々な気持ちを感じているか。

→シンプルな感情を伝えられる絵本を読むとよい。

- 言葉と動きのバランスがとれているか。

- 言葉以外でのやりとりができるか。

→できていなければ体を使って動きを!

- ◎聞くという体験を!(素話、長編の絵本など)そういう体験をしていくことで、聞ける子どもになる。

4. 幼稚園教育要領より「言葉」

- ・話せる子どもではなく、“話を聞く子ども”を育てる。

- ・自分を表現する言葉や自分なりの言葉で話せることで、見方を変えることができる。

5. 言葉の発達を促す

- ・伝えたい、話したい体験

体験→イメージ→言葉につながる。

不思議な世界・言葉にふれる→想像力をはぐくむ。

- ・伝わる喜び→言葉を使うことが楽しい

=聞き手がいるかどうか。保育者が聞いているだろうか。

- ・伝わらないもどかしさ→相手に自分の思いを伝える為にはどのようにすればよいかを考える機会。保育者が伝えていては考える力が育たない。

- ・自分なりの言葉、自分なりのペース→借り物ではない自分の言葉を獲得する。(何度も

第7分科会

繰り返す・否定的表現)

◎伝わる喜びと伝わらないもどかしさが両方あることで力になっていく。

できるだけ言葉で伝えたいが、気持ちと言葉にズレがある。自分なりの言葉になるには時間がかかる。自分で自分の気持ちを納得できるように待つことも大切。

6. 保育者の言葉を振り返ってみる

- ・丁寧に聞いているか。
 - ・プラスの言葉を伝えているか。
 - ・プラスの言葉になるよう工夫しているか。
- 子どもは行為を認められることが嬉しい。
子どもがしっかりできるような工夫や、子どもに合わせた環境づくりを。
- ・楽しい言葉の使い手になっているか。
- 子どもの言葉がプラスになるような、楽しくなるような言葉を使うことで子ども同士のやりとりも発達する。
- ・言葉を変えているか、見方を変えているか。
- 見方を変えると言葉が変わる。

7. 保育のなかの言葉

- ・「仲間」と「だめ」
- 4歳頃になると仲間意識が強くなり、途中で遊びに入ろうとすると「だめ」と言う。遊びが壊れてしまうというような思いと「だめ」を使ってみたい時期である。そのなかで言葉の意味を考えていく。
- ・言葉になるまでの時間
- 言葉になるまで時間がかかる。保育者はこのことを心のなかに入れておく。
- ・言葉の力、友だちの力
- 保育者の言葉だけでなく、子どもの言葉も変わっていくような関わり方ができるようにする。
- ・ワイワイと色々な意見がでることからの学び
- 正論だけでなく、多様な意見が出ることが大切。色々な人がいて色々な意見があるという

こと。時に保育者が「どうしようか？」と言葉を投げ掛け、ゆったりとした時間感覚を持つことも必要。

- ・遊びや仕事から生まれる言葉
- 子どもたちが自分で段取りを考えることにつながる。
- ・お話づくりは言葉づくり
- 噂と本当の話を入り混ぜながら想像力を膨らませる。

8. 児童文化財の活用（絵本の紹介）

- 「ぼちぼちいこか」…色んな人、言葉があることを知る。
- 「わたし」…色んな角度からの「自分」を見る絵本。
- 「ごろごろにゃーん」…物事の見方を変える内容。
- 「ロボット・カミィ」…続編がある、長い内容の本は、聞く力（次はどうなるかなどを楽しみにしながら）をつける。